

## 「2024年中国・浙江大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学教育学部2年 佐藤 美空

プログラムを通じて、積極的に中国語を話す主体性が重要だと学んだ。2日目、フードコートで注文の際、注文するのに勇気が出ず、長い時間かかってしまった挙句、勘違いから商品を取り忘れたまま出てしまい、店員さんに叫ばれるという失敗をしてしまった。この当時、店員さんに自分から声をかけることは絶対にできなかった。しかし、大学の売店で店員さんに「このノートが売り切れている、補充してほしい」と聞いたことを皮切りに段々と注文も臆することなくできるようになってきた。12日目、大学のアウトターを買うために浙江大生に教えてもらった店に行き、店員さんに質問しながら商品が買えた時には嬉しさと達成感があった。今となってはこのアウトターは自分の一番のお土産であり、宝物である。積極的に話すことで段々と自信がついてくるのだと実感した。加えて、国際理解の重要性、海外の文化や言語を知っておくことの大切さを痛感した。クラスメートのスペイン人に知っているスペイン語の曲を少し歌うと喜んでくれ、こちらも嬉しくなった。文化を理解し共有することの楽しさを実感した。また、韓国人の友人と会話をしている際、中国語でも英語でも何と云うか分からない単語の話題になった。韓国語では言い方が分かっていたので言うと、Yeah!と返ってきて、通じた!と感動した。ほんの少し知っている韓国語で会話できたのも嬉しかった。色々な国の文化・言語を知り、それを相手に伝えることの楽しさを実感した。中国留学前は、母国語ではない言語をネイティブのように話すことは至難の業で、翻訳機があるなら勉強する意味は何なのだろうかという疑問がうっすらと自分の中で生まれていたのだが、このような体験から、複数の言語を勉強しておいて損はないのだということを学んだ。また、英語を母語としない人同士で会話する際は英語を気楽に使えたので、それも新しい発見だった。留学については、まず学生だけがするものだという価値観が変わった。自分が受けた中国語の授業のクラスメートには大学生もいたが、大学を卒業した人の方がむしろ多かった。母国での仕事に中国語が必要、中国語が今後重要になると思った、中国で開業したい、などの理由で中国語を勉強しに来ていた。いつ何を始めようと自由なのだということを実感した。また、中国に長期留学してみたいとも感じた。日本人ではない人と関わるのは刺激的で、中国人を含め、海外の人と仲良くなるハードルは低いように感じた。

2週間滞在した中国だが、トイレトペーパーを常に持ち歩かなければならないことを除けばとても過ごしやすい国だったと感じる。まず物価、特に食費が安い。朝ごはんを食べに通い詰めた店があったのだが、1食の値段は4~5元と100円程度で済んだ。そのほかにも、タピオカミルクティーが1杯6元(サイズも大きい)、ノート2元、地下鉄も片道2~4元。外食・移動にお金がかからないことで、たくさん外に出て色々な人と仲を深めることができた。しかし、浙江大生に聞いてみたところ、杭州の平均的な会社員の月収は約6000元だそうだ。日本人には破格の物価の安さに思えるが、中国人にはそうではないのかもしれない、という気づきを得た。2つ目は、様々な作業がスマホで完結するということである。買い物を終えた後の支払いは、スマホでAlipayを開き、QRコードを表示し、読み取ってもらっただけで終わる。いちいち財布からカードを取り出して差し込んだり、タッチしたり、現金を出したりする必要がないので便利かつ時短だ。また、外食の際は、屋台など一部の店を除き、机に貼ってあるQRコードを読み取り、スマホの画面上で注文と支払いを完了したら、あとは待つだけで料理がやってくる。それから、地下鉄への乗車、下車もAlipayアプリを開き、QRコードを改札にかざすだけで非常に簡単である。驚いたのは、中国にはイヤホンという概念がない。ラジオを聴きながら散歩をする人、座ってTikTokを見ている人…多くの人がイヤホンをせず音を垂れ流しにする。また、道路事情も驚きが多かった。ウィンカーなしの突然の車線変更、クラクションの頻繁さ、タクシーが一般道で80キロ近く出す…などである。これらの光景に最初はとまどったものの、だんだんとこれが中国の人の自由さなのだと個性として尊重できるようになっていった。逆に自由で、生きやすい気もしてくる。

2週間と短い期間だったが、5~6時間睡眠が当たり前になるほど毎日が濃いものだった。平日は1日に2コマの中国語の授業、午後は授業か自由時間。平日の午後にアクティビティが4回用意されていた。土日は1日自由時間だった。午後に授業とアクティビティが重なっている場合は、アクティビティを優先する形になっている。最終日が近づくにつれ授業とクラスにいつの間にか愛着が湧いていた自分にとっては、これが少し辛かった。アクティビティでは、キャンパスツアーや街歩きなどをした。初回のキャンパスツアーでは浙江大学のメインキャンパスを歩いた。自分が中国に興味を持つきっかけとなった、大学生を描いた中国ドラマを思い出し、今日の前に中国の大学の景色が広がっていることに感動した。また2回目のアクティビティの後、夕飯と一緒に食べ、日本語を勉強している浙江大生のボランティアの人たちと仲良くなれたのも印象に残っている。授業は中国語で行われ、4技能ごとに分かれていた。クラスメートたちは春夏言語履修生として中国語を学びに来ている外国人で、年齢も20-30代と様々だった。日本人は自分と東大生だけだった。授業後は、京大生の友人やクラスメートの東大生、留学生たちと昼食をとり、その後、予定がない人たちで喫茶店でおしゃべりをした。モンゴル、トルクメニスタンなど、様々な国から来ているクラスメートたちと関わった。ある日の昼食、スペイン人が日本では仲の良い人にしか聞かないような質問を皆に振ってきたことに少し笑ってしまったのだが、このようにオープンに色々なことを話すのだという発見ができ良かった。クラスメートの東大生と仲良くなれたことも普段ない貴重な機会だったと感じる。土日は、上海観光に出かけたり、巡り合わせで出会った浙江大生や言語履修生の日本人と京大生たちで遊びに出かけたりした。中国のカラオケでは、普段Youtubeで聴いている中国語の歌を歌え、嬉しかった。中国でできた友人たちと過ごす時間はかけがえのないもので、帰りたくないと思っていた。クラスメートも浙江大生も京大生も皆優しく、色々なことをしてくれたり、助けてくれたりした。自分ももっと人を喜ばせる人になろうと思った。ある言葉を聞き、ずっと心掛けていたことがある。4日目、口語の授業での先生の言葉である。「普段i(内向)人でも、授業中はe(外向)人にならなければならない。」折角なら、授業外でもe人でいよう、と思った。誰かを昼食に誘ったり、帰国の飛行機に乗る前、別れのメッセージを中国語で友人たちにWeChatで送ったりした。他の人にとっては当たり前かもしれないが、自分にとってこれはかなり珍しい事態で、このe人作戦は功を奏したと思う。説明会で参加者や浙江大生、留学生と仲良くなれる、(他の国だったが)今でも連絡を取り合う友人ができた、などと聞いた時は不安だったが、それは杞憂に終わった。プログラムの参加を考えていて、これを読んでいる人はぜひ参加して欲しい。迷ったらやるというのもこの2週間で得た教訓だった。

この先の事について。中国に2週間滞在した中で、勉強のモチベーションが上がり、HSK5級を取るという目標ができた。浙江大生に、中国語が上手だと褒められ、自分の中国語が?と拍子抜けしたが、その言葉を信じてみよう、と思う。将来は中国に関わる仕事をするのも楽しそうだ、と思うようになった。また始めに書いたように、人生のどのタイミングでどんな選択をしてもいい、ということ学んだため、その時々で生じる目標や夢に応じて柔軟に考えようと思えるようになった。中国語はまだまだ未熟だが、これからも勉強を頑張ろうと思う。中国での2週間は、本当に楽しく、常に実りのある時間だった。一緒に過ごしてくれた人たち、お世話になった人たちに、改めてありがとうと言いたい。